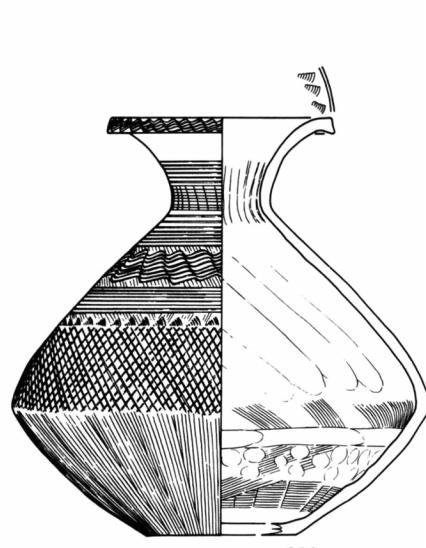
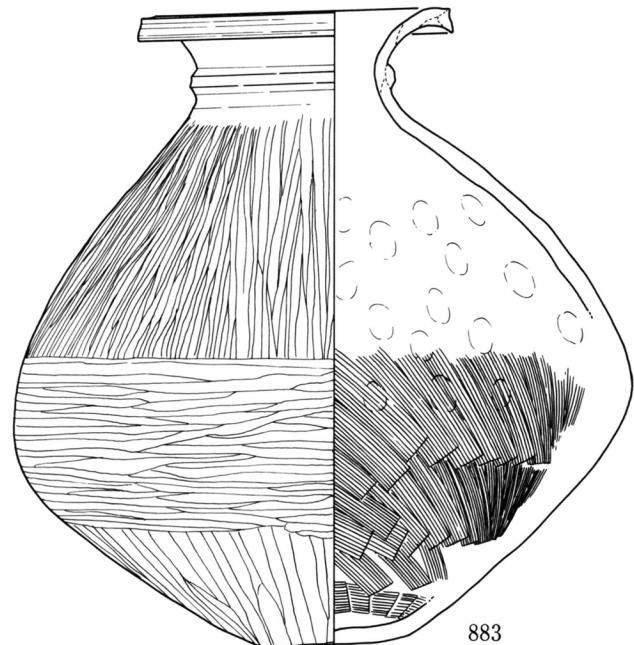


881 (1 : 8)

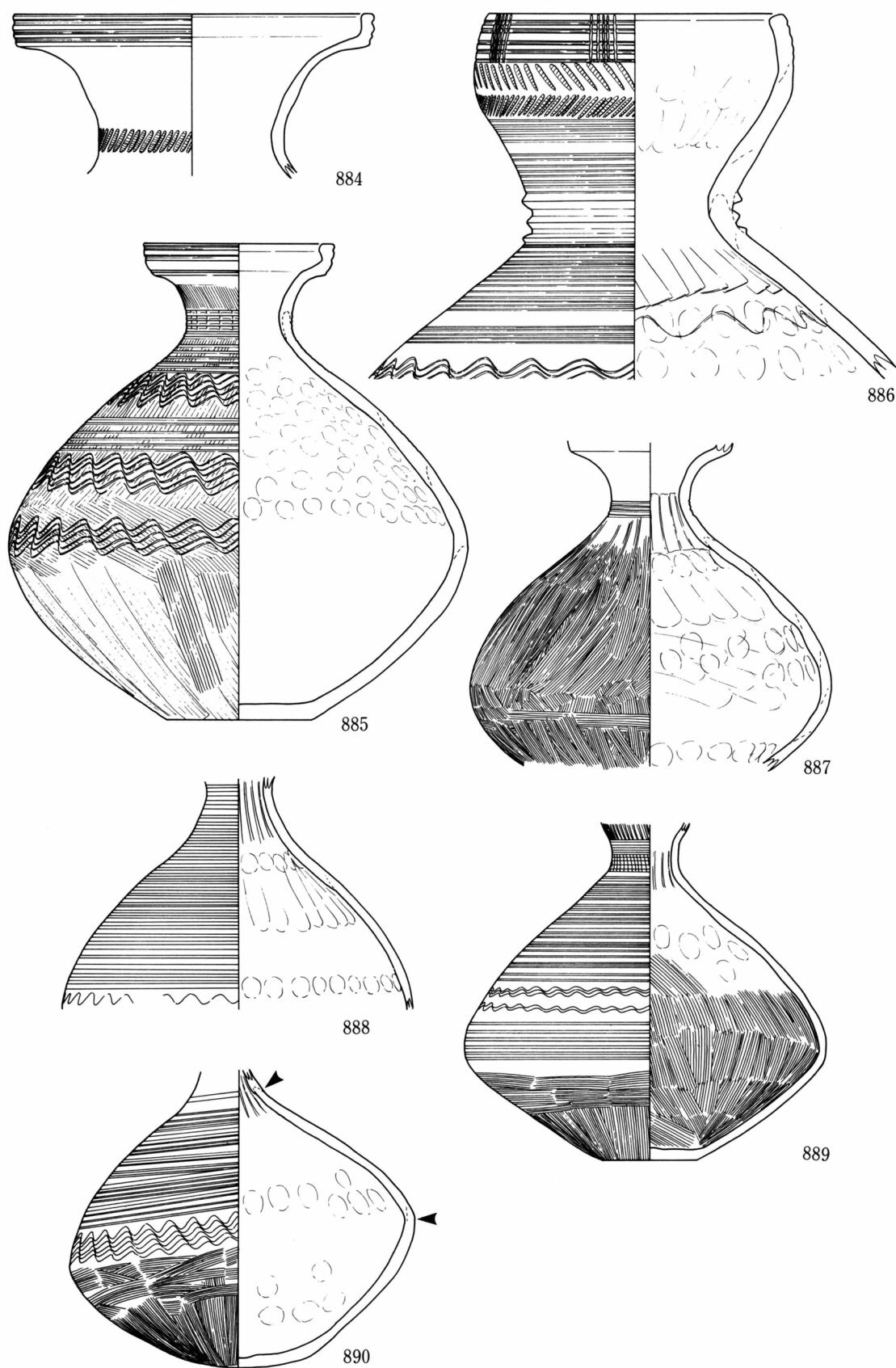


882

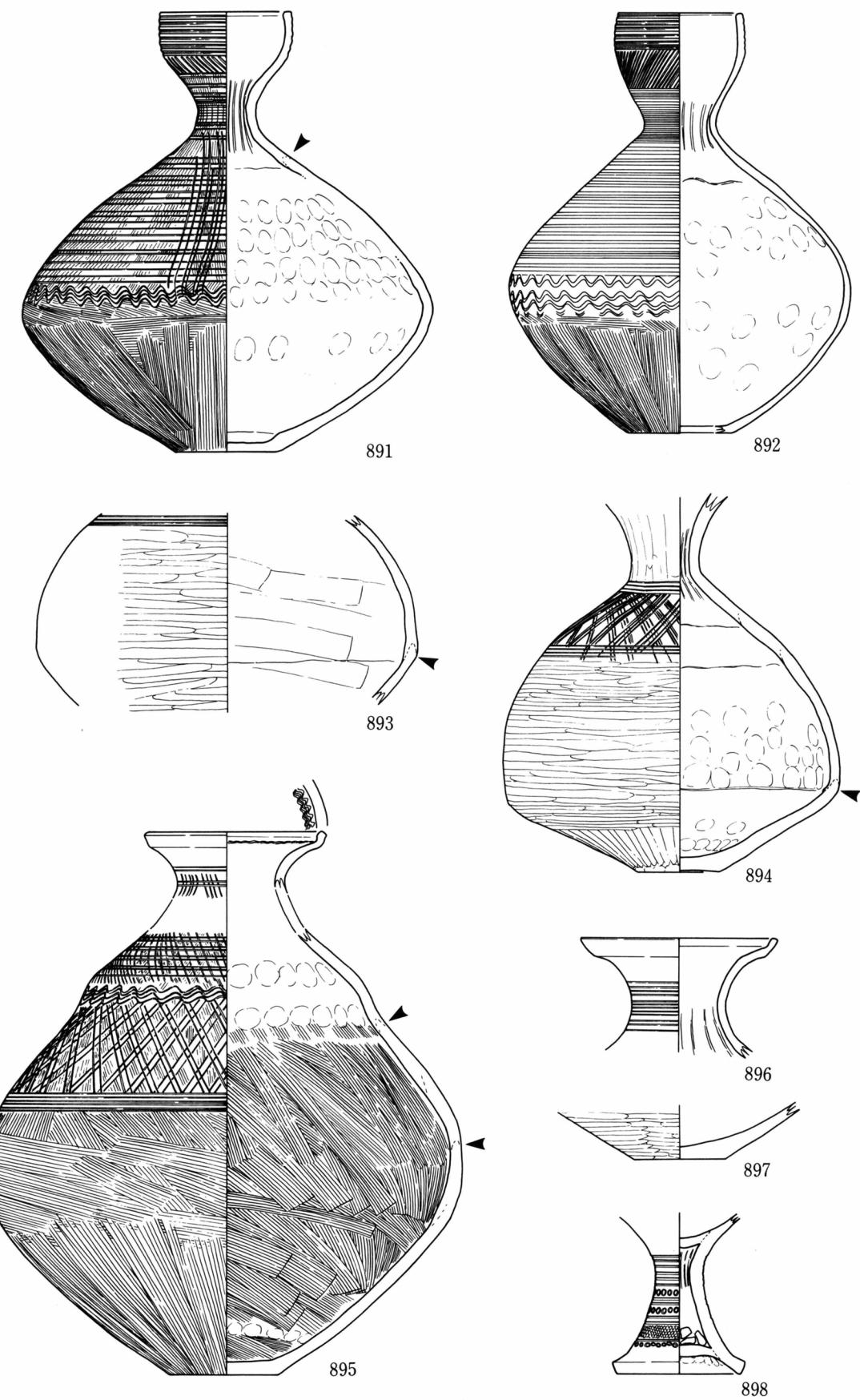


883

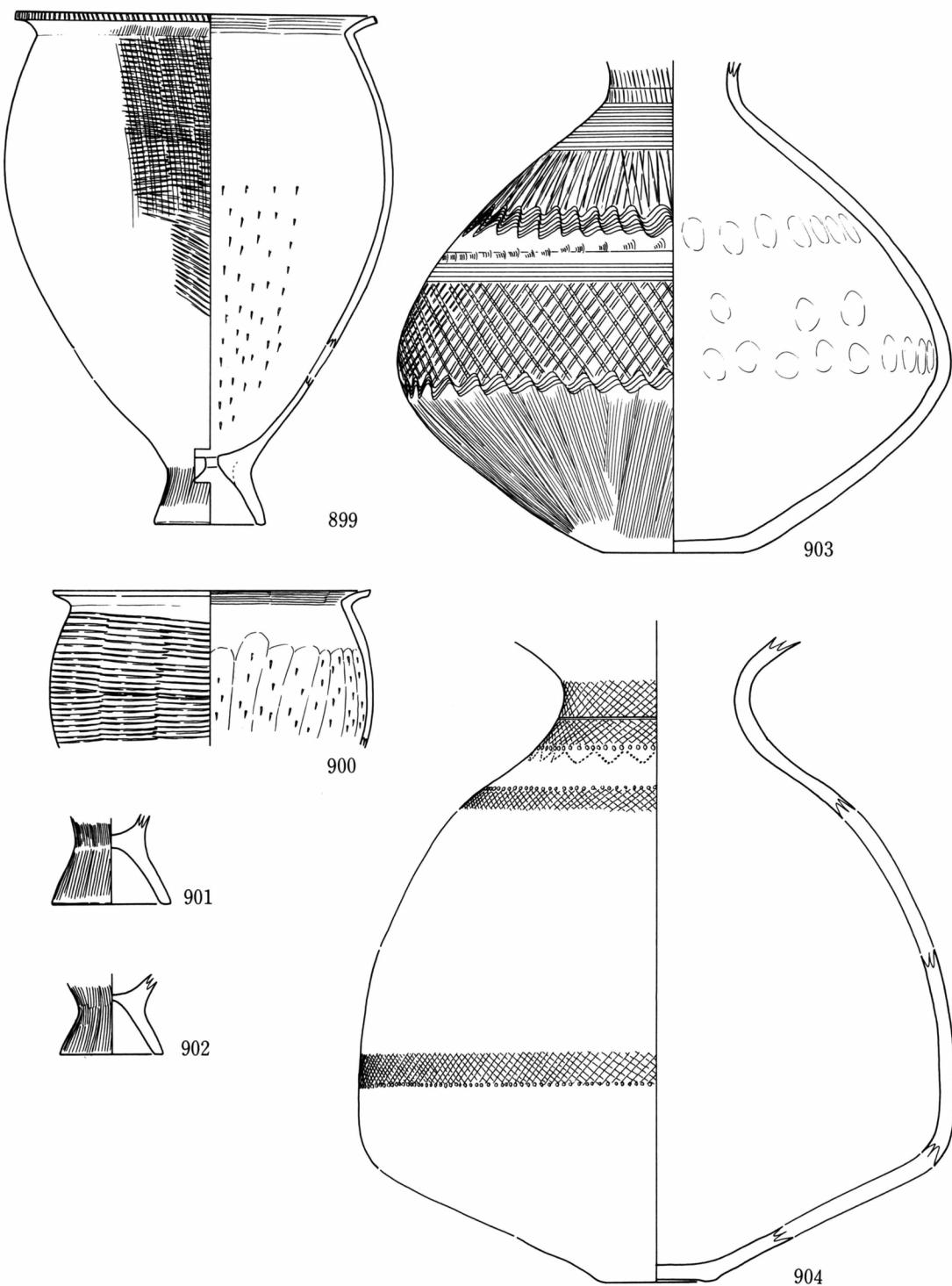
第169図 SB40出土土器 (1)



第170図 SB40出土土器 (2)



第171図 SB40出土土器 (3)



第172図 SB40出土土器 (4)

888～892は細頸壺 Wa。891は、口縁部6条沈線後に回転ヨコナデ、以下板の斜位連続圧痕→櫛III種（2・2・3）直線紋。頸部は簾状紋。体部は櫛III種（3・1・3）のようだが間隔はバラツキを生じる）の直線紋と波状紋。その上に縦位の櫛III種（3・1・3）直線紋が施されている。他に櫛III種は889（3・2）、892（2・2・2・2）。

893は体部外面を研磨で仕上げる。894も体部の仕上げは研磨である。体部上半は斜格子紋を施した後に直線紋を上下に施している。底部はやや上げ底である。どちらもA系統。

895は櫛III種（2・2・2）を施す折衷型である。形態は体部上半に隆起を形成し、口縁部

と外傾気味の受口状でB系統との関係を示す。しかし、製作技法は明らかにW系統である。

896も同様である。

897は底部を平坦にして、体部下半に研磨を施すW系統壺である。伊勢湾西岸部の手法である。

898は高杯の脚台部である。中に小石を11個入れてから上下を粘土盤充填で塞いでいる。振れば音がする。

899は台付甕 Wb。底部には焼成後穿孔が施されている。台付の有孔土器。900はタタキで外面調整を終了している。タタキ目は幅が広い。901・902は脚台。

903・904は別の調査で出土した同じ土器群の一部。903は斜格子紋のみ櫛III種で施紋されている。頸部から体部上位にかけて縦位に粗いハケメ状の施紋を施した後、直線紋→波状紋→扇形紋→直線紋→斜格子紋→波状紋と施されている。

904はB系統壺。鋭い切り込み状沈線の斜格子紋横帯を基調として刺突紋や櫛刺突鋸歯紋を加える。

S E 01 III—2期。A系統は905～908、D系統は912・923・924、C系統は925、他はW系統である。

A系統 905は細頸壺 Aa。口縁部は回転ヨコナデ。頸部には太い櫛描直線紋を施す。906は細頸壺 Aa。口縁部の屈曲部にハケメ工具刻み、頸部にはユビによる幅の広い浅い沈線を2条施す。907は細頸壺 Ab。口縁部は回転ヨコナデ。体部櫛描紋は櫛III種かもしれない。縦位に波状紋が施されている。908は細頸壺 Aa。口縁部は回転ヨコナデ。

D系統 912は太頸壺の頸部下位。沈線のあと円形浮紋を貼り付け管状工具で圧痕を加える。923は口唇部上下端にハケメ工具刻み、体部上半にはハケメ工具の直線紋が施されている。口唇部の特徴は伊勢湾西岸部を分布の中心とする強加飾単純口縁甕に類似しており、伝統的な甕Dとは異なる。924は口唇部が垂下してハケメ工具刻みが施されている。体部上半にはハケメ工具の直線紋が施されている。伝統的な甕Dである。

C系統 925は深鉢 Cb。口縁部は円周4分割の位置に山形状突起がつくられる。体部外面は櫛条痕、口縁部内面には櫛刺突紋が施されている。底部には布目痕がある。全く伝統的である。

W系統 909・910は細頸壺 Wb。口縁部は回転ヨコナデで外面に凹線を残す。911は細頸壺の体部。

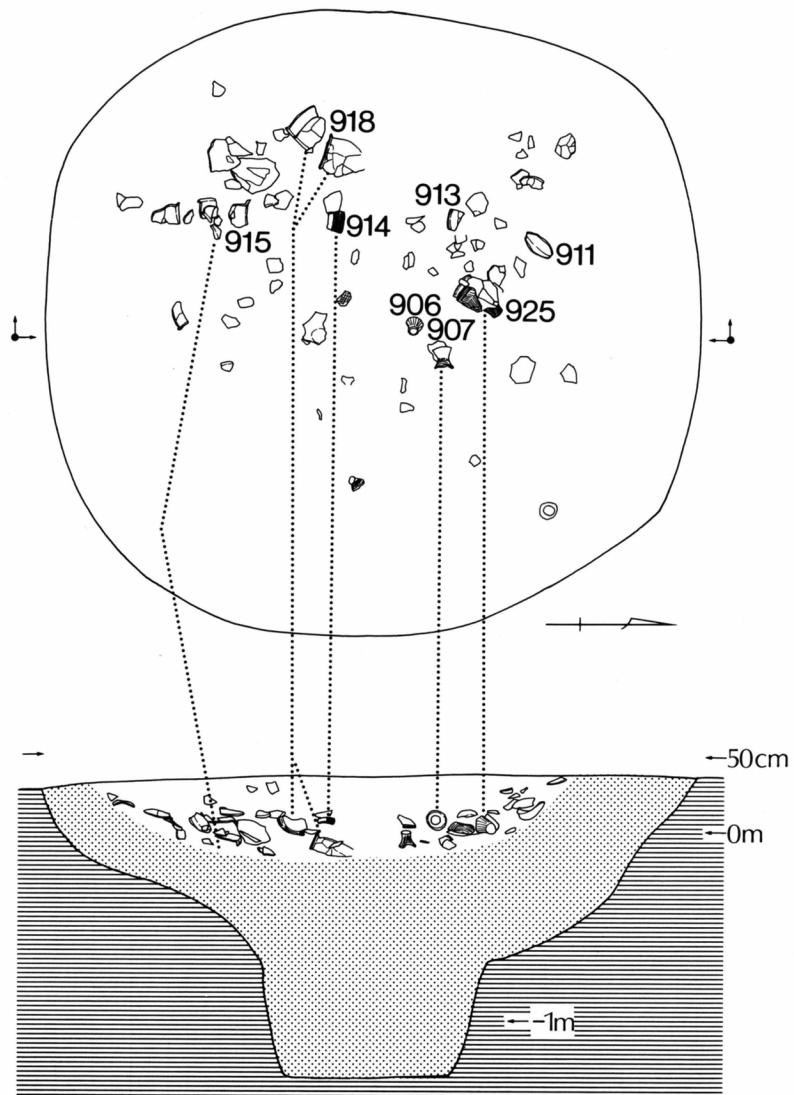
上半は櫛III種（2・2・2）による直線紋と波状紋の反復、下半は板ナデのあと研磨を加えている。

912・914は鉢。後者は簾状紋3段、以外の部分には研磨を施している。

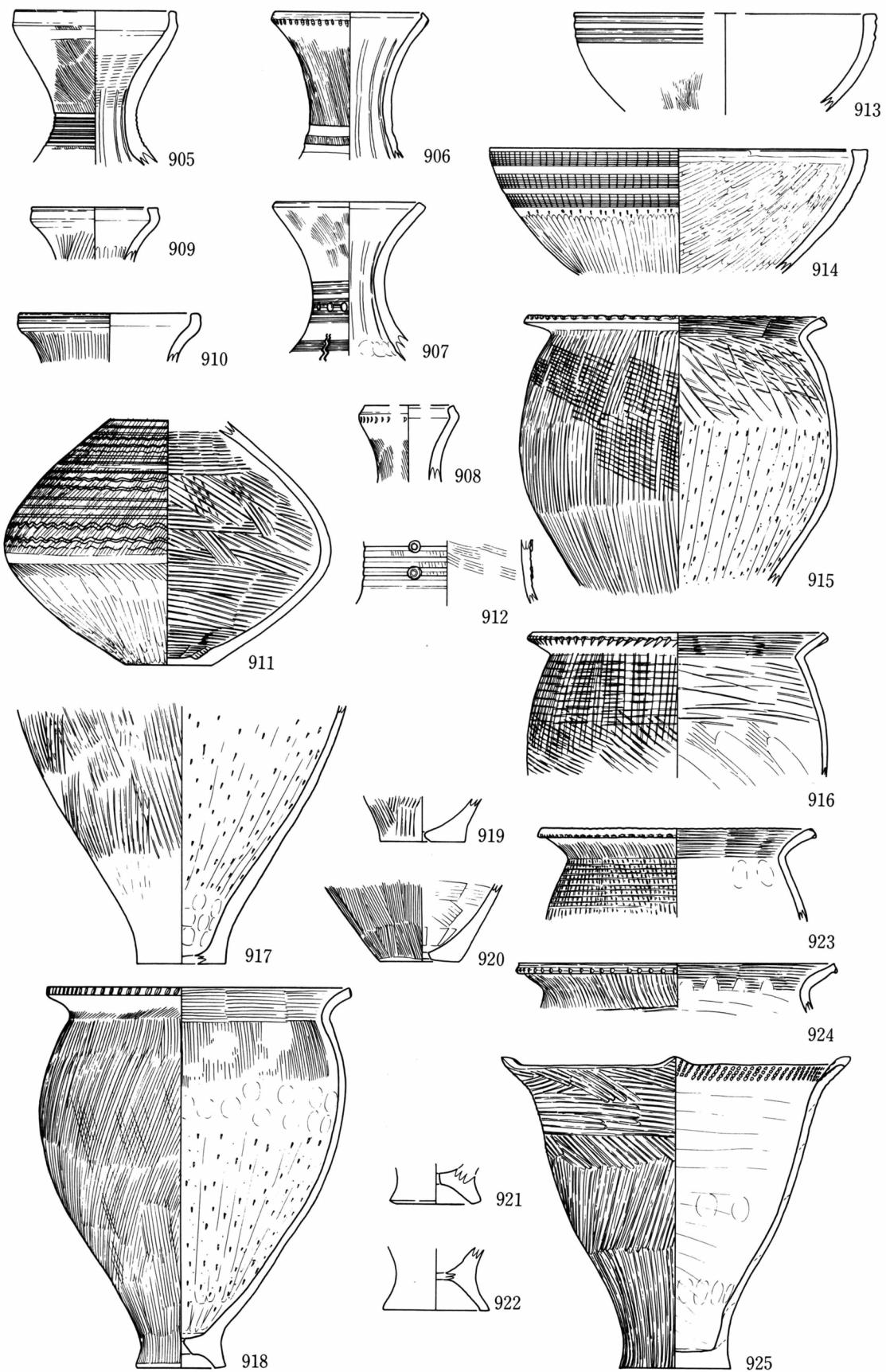
915は口唇部上端にハケメ工具刻みが施されている。手法的には珍しい。

918は台付甕 Wa。底部には焼成後穿孔がある。台付の有孔土器。体部内面にケズリ痕はあるが、外面にタタキは観察できない。919・920は平底の有孔土器。

921は台付甕 Wa の脚台部、922は台付甕W（A）の脚台部。



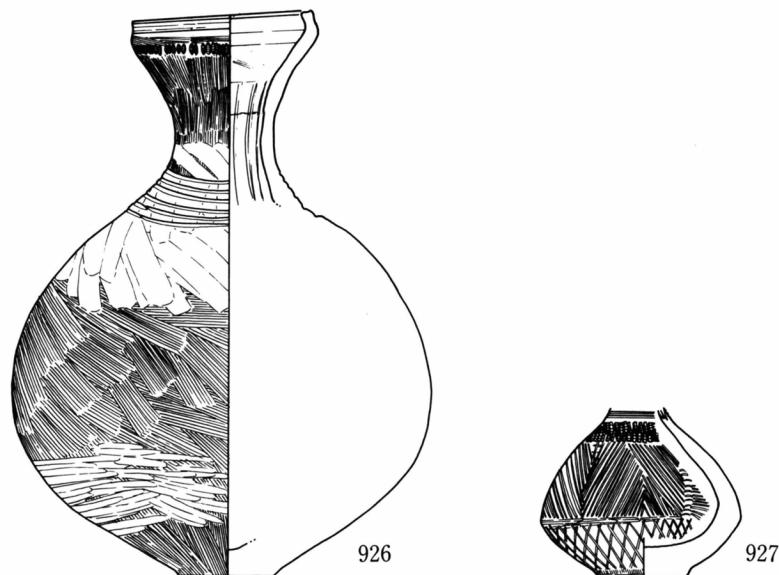
第173図 SE01土器出土状態（1：40）



第174図 SE01出土土器

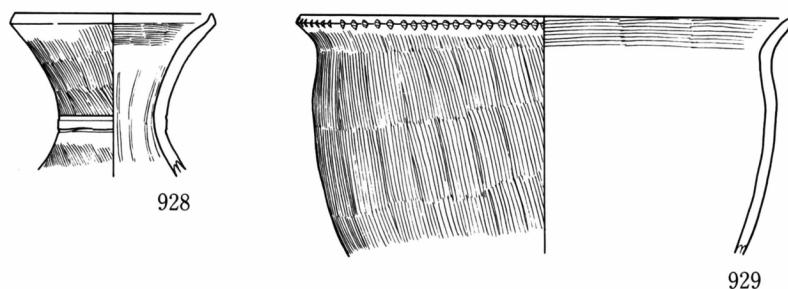
S E 03 III—1期。926は細頸壺 Aa の変形形。口縁部は形態が細頸壺 Wb に類似し回転ヨコナデが施されている。屈曲部にはハケメ工具刻みが施されている。体部上位は沈線 6 条、以下はハケメをそのまま残し無紋である。体部は球形化し、下半の研磨が成形第 1 段階の部分をわずかに示している。

927は頸部直下にコンパス鋸歯紋が施され、以下は沈線と言うよりは磨消線によるくずれた複合鋸歯紋、斜格子紋が施される。複合鋸歯紋の下には縦位の刺突列が観察できる。



第175図 SE03出土土器

S E 06 III—1期。928は細頸壺 Aa。口縁部は回転ヨコナデ。頸部に沈線 2 条。おそらく他は無紋。929は甕 Ad.



第176図 SE06出土土器

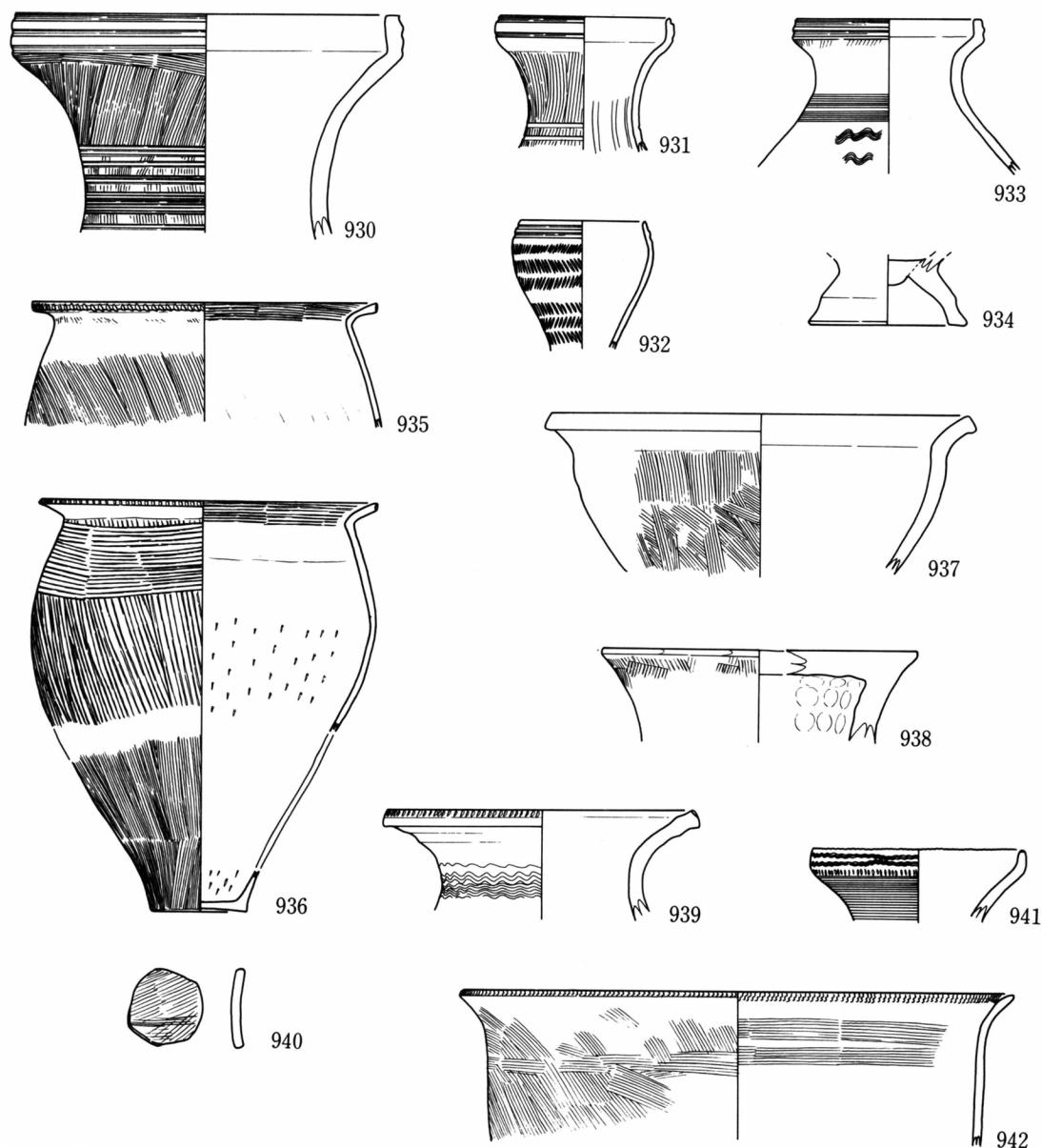
S E 07 III—1期。930は太頸壺 Wb。口縁部は 3 条沈線後に回転ヨコナデ。頸部は櫛III種（3・2・3・2）直線紋。931は細頸壺 Wb。口縁部は最上部に 2 条沈線後に回転ヨコナデ、以下ハケメ工具圧痕を傾きを変えながら 6 段施す。933は太頸壺 Wc。口縁部は 2 条沈線後に回転ヨコナデ。体部はおそらく直線紋と波状紋の反復。934は台付壺の脚台。

935はタタキのない甕。936は体部上半にハケメ工具による直線紋を施す甕 Wb。

937は鉢あるいは台付鉢。938は台形土器。色調は非常に白っぽい。

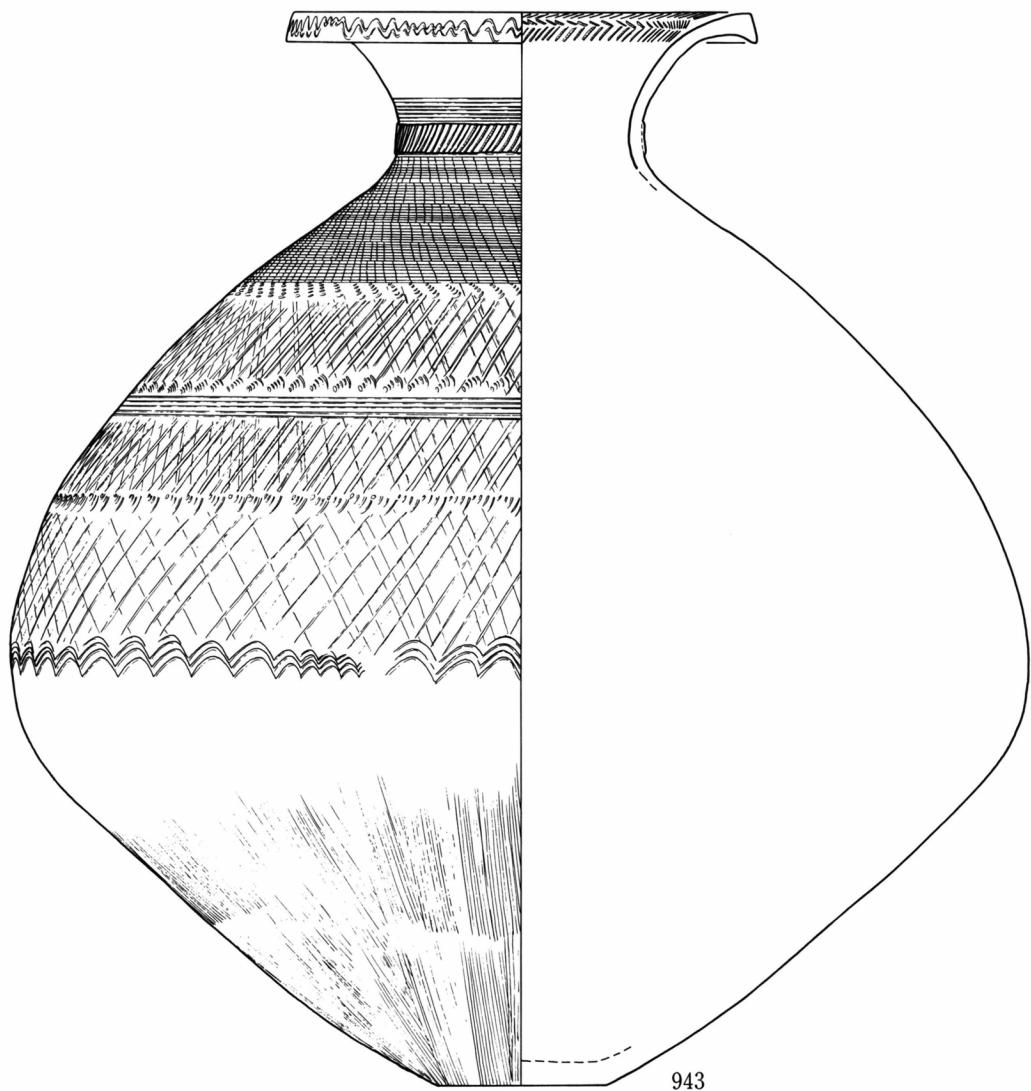
939はB系統壺。口唇部にはD字圧痕、頸部には櫛I種A類の波状紋が施される。黒色仕上げ。

941は混入。細頸壺 Aa。口唇部に刻みを施しており、I-1a期に属す。942は口唇部と口縁部内面に二枚貝施紋がある。

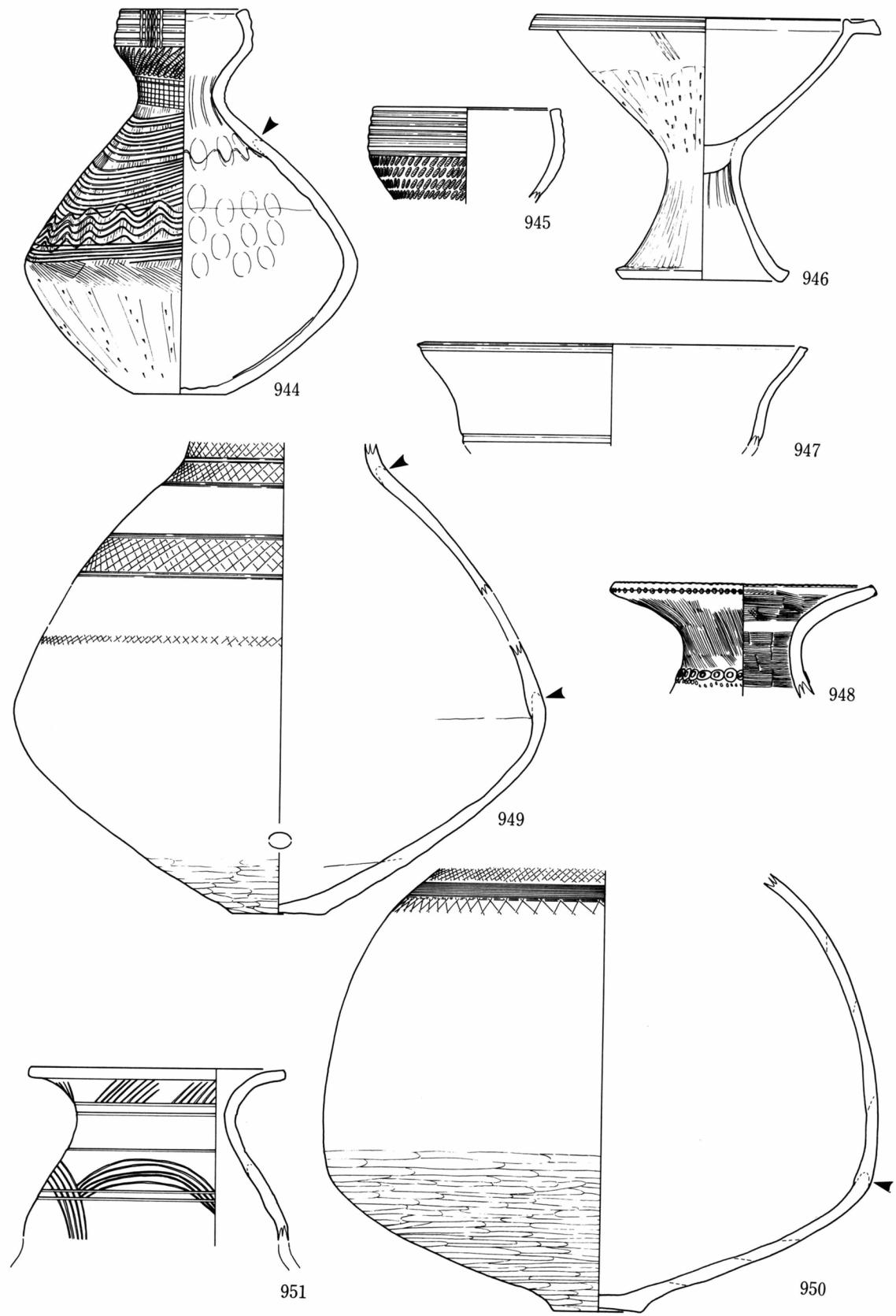


第177図 SE07出土土器

S Z01 III—1期。943は高さ 56cmの太頸壺 Wa。口縁部内面はハケメ工具の羽状圧痕紋、口唇部には波状紋、頸部以下は直線紋→ハケメ工具刻みを加えた幅広の突帯→簾状紋 6段→扇形紋→斜格子紋→扇形紋→直線紋→斜格子紋→扇羽紋→斜格子紋→波状紋となる。櫛の原体は細い管状工具を束ねた櫛（櫛II種 b類）のようだ。



第178図 SZ01 (SD05) 出土土器



第179図 SZ02 出土土器

S Z 02 III—3期。944は細頸壺 Wa。口縁部は3条沈線後に回転ヨコナデ、その上を縦位の櫛が切る。その下はハケメ工具の両端を支点として交互に移動させるコンパス鋸歯紋と同じ動きをするが、紋様はジグザグ状となっている。頸部以下は簾状紋→直線紋→波状紋。体部下半ではケズリのあと板ナデが施されている。全体に厚手で鈍重。櫛原体は櫛II種b類。

945は細頸壺 Wa 口縁部をやや大きくしたもの。5条沈線後に回転ヨコナデ、この下はハケメ工具の連続圧痕を施している。

946は高杯 Wb。杯部の立ち上がりは比較的直線的である。口唇部に杯部外面にはケズリを残している。

947は台付鉢。他に類例は知らない。口縁部と杯部下部に沈線を施している。色調は非常に白っぽく砂粒が目立つ。

848はII期太頸壺 A の混入。

949～950はB系統壺。いずれも黒色仕上げ。前2者は鋭い切り込み状沈線の斜格子紋横帯を基調とする。949には体部下半に焼成後穿孔が施されている。951は沈線紋。連弧紋は系譜関係をよく示している。

S Z 03 III—2期。土器は完全近くまで復元できるものと、他に接合関係を持たない破片とがある。952は細頸壺 Wa。櫛III種(2×n)直線紋→ハケメ工具連続圧痕。953は太頸壺 Wb。4条沈線後回転ヨコナデ、その上を櫛(櫛III種: 2×4)で切る。

954はA系統円窓付壺。口縁部は強いヨコナデで弱い段をつくる。

955は体部上半をナデ調整した後に波状紋を施す。体部上下界は弱い稜をなす。

958は櫛III種(2・2・2)を原体として直線紋→波状紋→斜格子紋→直線紋→波状紋の順で施される。975は頸部の太いや小形の壺。体部にはタタキ調整の痕跡を残す。施紋は、頸部にハケメ工具連続圧痕、体部に櫛I種a類の細密な波状紋(9条以上)2段を施す。958は体部下半に横方向の研磨が施された壺底部で伊勢湾西岸的。

959はA系統壺底部、やや上げ底をなす。960はA系統台付甕の脚台部か。

961は甕W。962は甕 Af。

963はB系統壺。口唇部は板の刻み、頸部は縦位にハネアゲ紋を施した後横位直線紋の上にさらに斜位短線紋を加える。体部は上下に揺れる横線紋→横位短線紋を反復する。櫛原体は櫛I種A類。個々の櫛歯は鋭い条線となっている。黒色仕上げ。

946は太頸壺 Wb。口縁部は3条沈線後に回転ヨコナデで仕上げる。691は太頸壺 Wa。口縁部内面には瘤状突起が施されている。口唇部は小さく上方に拡張され、斜格子紋が施されている。

966は系統のはっきりしない細頸壺。口縁部は強いヨコナデによって段(凹線と呼ぶべきか)が形成され、頸部には2条めぐる。体部はナデ調整が確認できる。

967は円窓付壺。口縁部はヨコナデされ、頸部には沈線がめぐる。

968は細頸壺 Wa。口縁部は4条沈線後に回転ヨコナデ、以下はハケメ工具の連続圧痕→押し引き紋→連続圧痕→直線紋→簾状紋→櫛III種直線紋と続く。直線紋の上には櫛III種で

縦位直線が施されている。969は太頸壺Wの体部上半。直線紋が観察できる。

970は高杯 Wa。口縁部は2条沈線後に回転ヨコナデ。口縁部の短く内傾して立ち上がる例は珍しい。971は高杯脚部。

972は甕 Wd。口縁部は水平近く外折し、回転ヨコナデが加えられている。口唇部は凹面をなし、上端がやや上方に拡張される。刻みは下端に施される。体部はハケメ工具の直線紋と波状紋が施される。タタキは観察できない。内面にはケズリを残す。

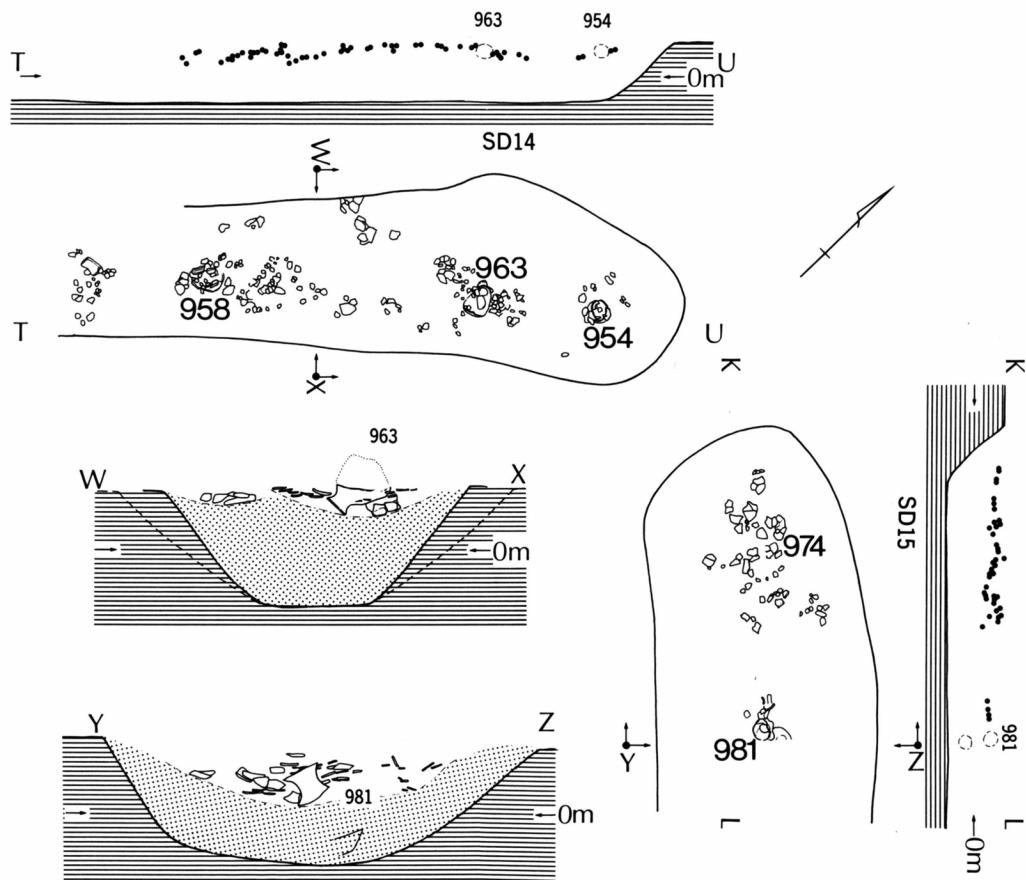
973は口縁部が強く外折し、口唇部にはハケメ工具刻みが施される。

974は甕 Wc。「く」字状に外折する口縁部は外面にユビオサエ痕を残す。口唇部にはハケメ工具圧痕が施されている。体部はタテハケメのあとナナメハケメが施され、その上にハケメ工具連続圧痕が部分的に施されている。正面だけであろうか。タタキは下半に疑わしい痕跡が観察できる。内面はケズリを残す。

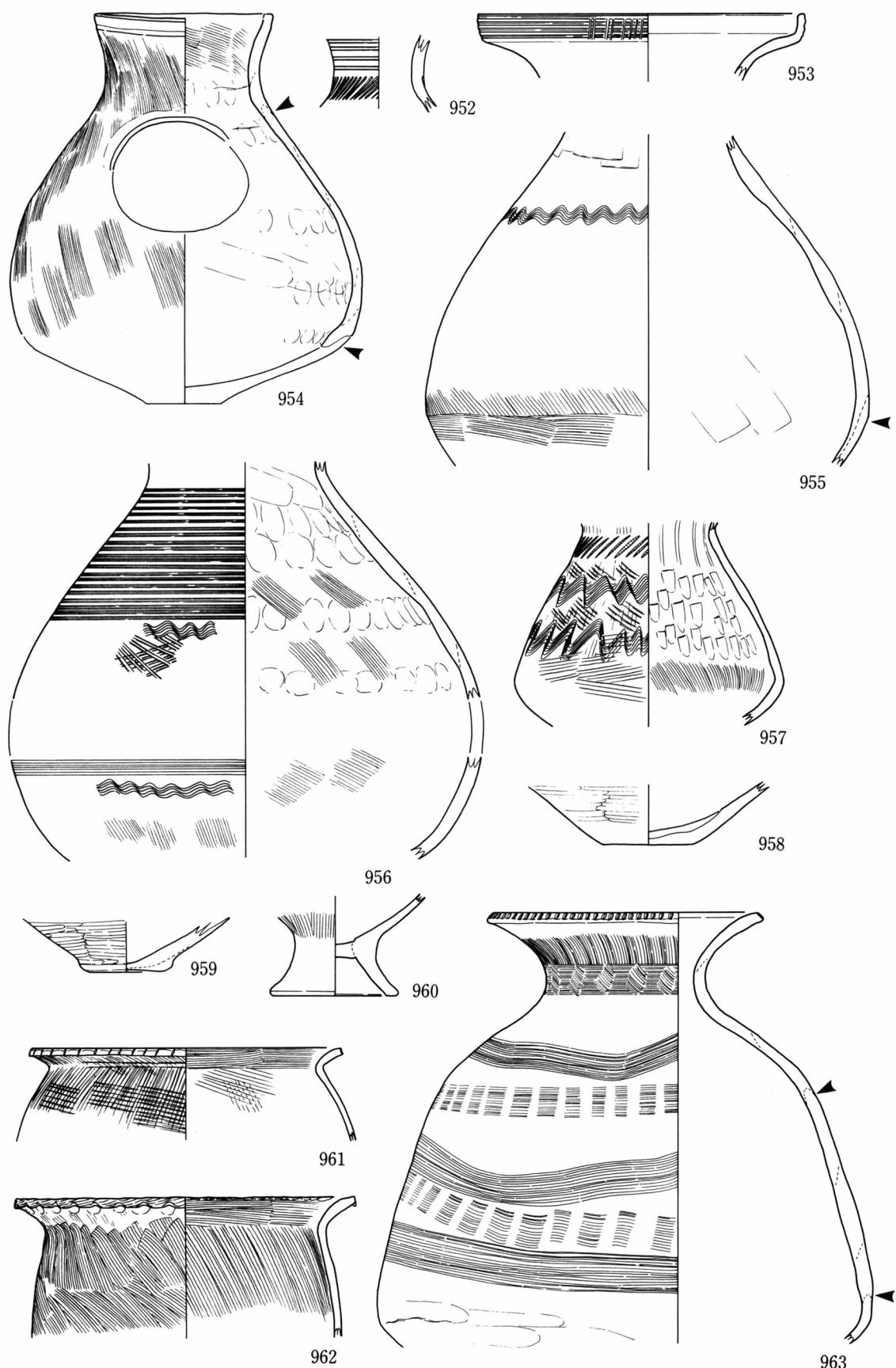
975は口縁部が受口状をなす甕 We。口縁部外面には板の刻み、体部上半にはハケメ工具の直線紋が施されている。

976は甕W底部。成形はc 1。997は甕W底部。成形はa。

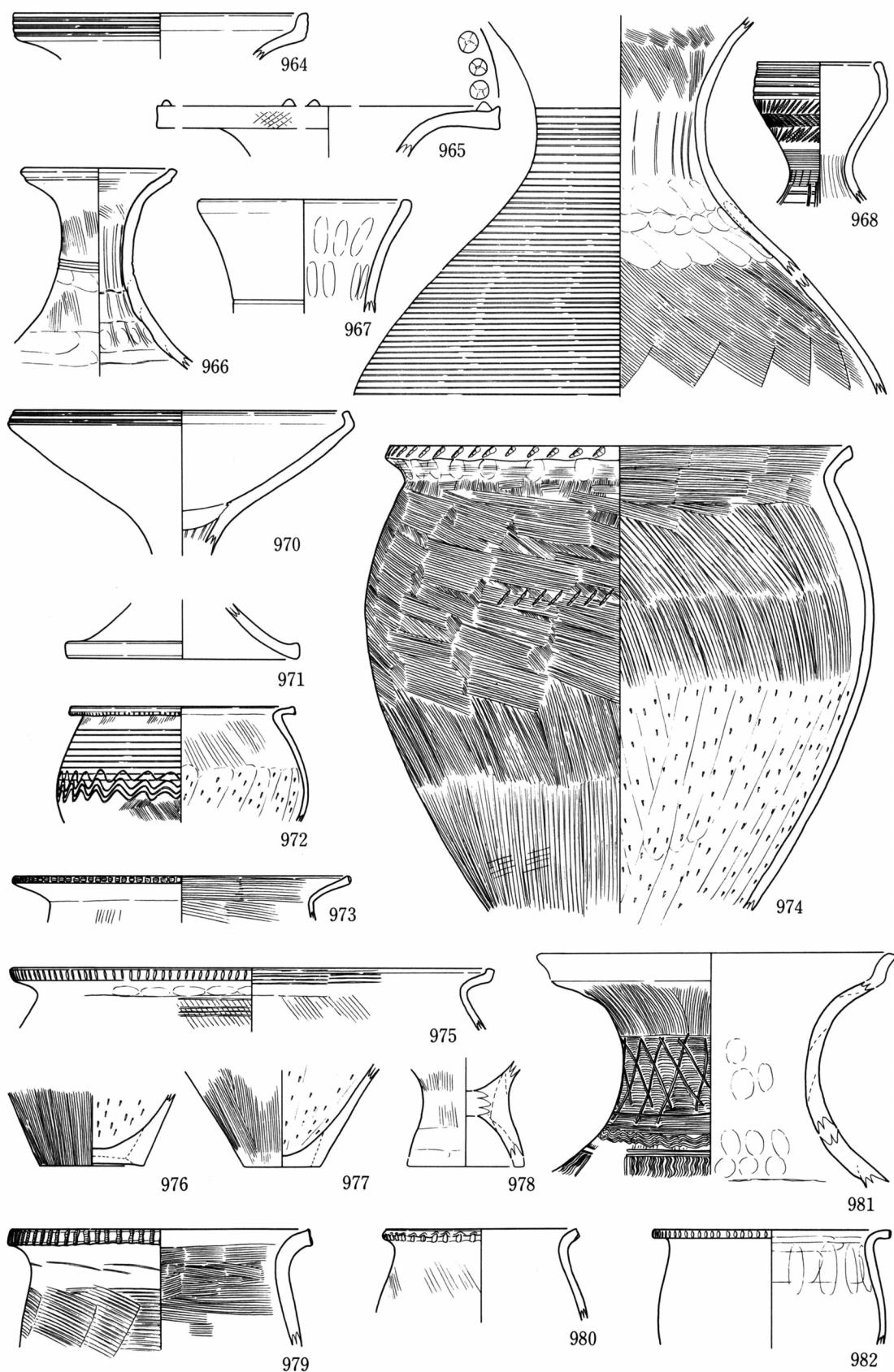
978はB系統台付甕脚台。



第180図 SZ03土器出土状態 (1:40・1:80)



第181図 SZ03 (SD14) 出土土器 (1)



第182図 SZ03 (SD15) 出土土器 (2)

979は厚手のかっちりした甕で、口唇部にハケメ工具刻みを施す。混入か。

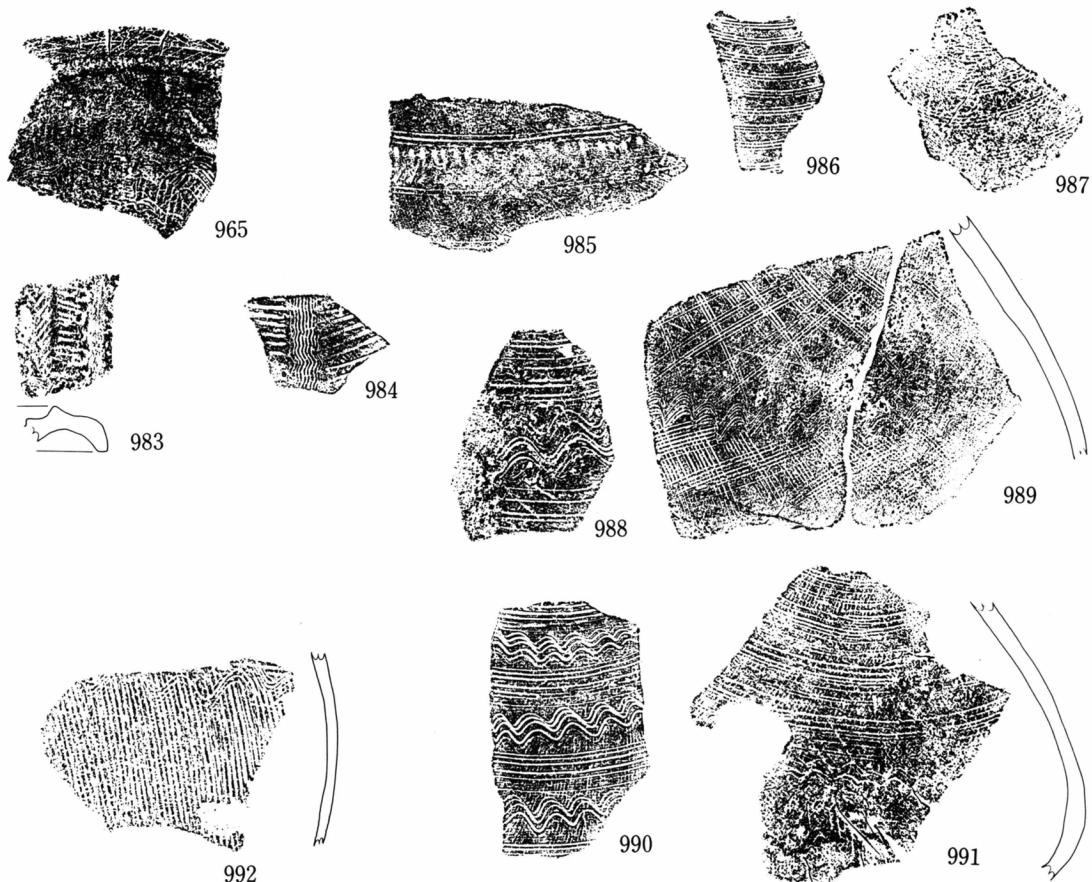
980は口縁部が小さく外反し、口唇部下端に刻みが施されている。

981はB系統壺。口縁部はおそらく受口状をなす。頸部は縦位にハネアゲ紋を施した後横位直線紋→沈線斜格子紋→横位波状紋と施され、体部は縦位に波状紋の単位を幾つか施した後に平行沈線(原体は半截管状工具か)で囲む単位紋を施す。982はB系統甕。おそらく台付。体部外面はナデ調整で仕上げられる。

983は太頸壺 Wa。口唇部は垂下し、上面には突帯がめぐる。施紋は管状工具圧痕の他は不明。

984は細頸壺 Aa の体部破片。縦位波状紋と磨消線が施されている。985は壺体部のコンパス鋸歯紋。

986は櫛III種 (3・3・3)。987は櫛III種 (4×n)。988は櫛III種 (2・2・2)。989は櫛III種 (3・3・3) の斜格子紋。990は櫛III種 (3・2・2) だが不揃い。991も不揃いな櫛III種 (2・3・1・2)。992は甕 Wd。



第183図 SZ03出土土器 (3)

- S D 01**
(図版49)
- III—1期。1080は細頸壺 Wb。口縁部は2条沈線後に回転ヨコナデ。1071は太頸壺 Wc。口縁部は2条沈線後に回転ヨコナデ。頸部以下は簾状紋施紋後、櫛III種(2・2・2・2)直線紋と波状紋の反復。1072は大形鉢Aで、口縁部に指頭圧痕紋。1073は甕W。
- S D 02**
(図版49・50)
- A系統**
- III—3期。1074～1079はA系統、1080～1082・1085・1086はW系統。1083はB系統。1074は太頸壺。口縁部内面には瘤状突起と三角形刺突紋が施されている。口唇部はヨコナデ後にハケメ工具による刻みが上下端それぞれ別に施される。頸部以下は断面三角形突帯と管状工具連続圧痕→板のエッヂによる羽状圧痕紋→板によるコンパス鋸歯紋→磨消線の順で施されている。1075は太頸壺A。口縁部はやや垂下し、口唇部にハケメ工具の刻み、口縁部内面は波状紋と円形浮紋に管状工具圧痕を加える、頸部外面には振幅の大きな波状紋→管状工具圧痕紋→直線紋→コンパス鋸歯紋と施されている。体部は櫛描紋を基調とするようだ。
- 1076は縦位波状紋の後に磨消線を施している。
- W系統**
- 1077は大形鉢底部。1078・1079は大形鉢上半で、口縁部に指頭圧痕紋が施されている。1080は細頸壺 Wa。口縁部に3条沈線後回転ヨコナデ、以下は櫛押し引き紋と直線紋を反復する。
- 1081は縦型流水紋。波状紋はコンパス紋。1086は少ない破片からかなり無理をして復元した太頸壺 Waである。口縁部は内面に櫛羽状紋、口唇部に波状紋、体部外面は櫛III種(基本は2・2・2・2のようだが途中からくずれる)で直線紋と波状紋を反復する。
- B系統**
- 口唇部には板による部分圧痕。頸部は2条平行沈線(半截管状工具か)を4段巡らした後鋭い切り込み状の沈線で斜格子紋と鋸歯紋を施す。以下も同様の手法。黒色仕上げ。1084は外面にケズリを残す系統不明の鉢。
- S D 03**
(図版51～
図版54)
- III—1期と2期の混在である。W系統には若干III—3期もまざるようである。1087～1089・1112～1120・1130・1146・1149～1159・1165～1168・1171・1176はA系統、1091・1161・1163はB系統、1160はC系統・1133・1147・1148はD系統、1090・1132は系統不明、それ以外はW系統。
- A系統**
- 1087は頸細頸壺 Aa。頸部の4条沈線以外紋様不明。1088は頸部直線紋の下にコンパス鋸歯紋。1089は細頸壺 Aa の変容形。磨消線紋系。1112は円盤充填の脚台。1113は櫛描紋系で、1089と同様変容型。櫛描紋は櫛III種(2×n)。黒色仕上げ。1114は細頸壺 Aa。ハケメ磨消帶の名残。1115は口縁部に回転ヨコナデ。内面には板のコンパス鋸歯紋、口唇部は櫛刺突紋。1118は口縁部回転ヨコナデ後に波状紋を施す。体部は直線紋→鋸歯紋→鋸歯紋内部を一つおきに浅い沈線を施す。体部中央に焼成後穿孔。1119・1120は円窓付壺。どちらも口縁部は回転ヨコナデ。前者は頸部に沈線4条、後者は体部下半を研磨する。1130は他に類例のない形態。1146・1149は甕 Ad。1147は口縁部に回転ヨコナデ。W系統に近似する。甕脚台は、立ち上がりの内彎するものが多く、中には1157のように天井部にヘソ状の突起を残す例もある。

1165は円窓付壺か。1166は振幅の大きな波状紋を施す小形壺。1167は有孔鉢。1168は口縁部と頸部の隆起がB系統、他はA系統の特徴を示す。体部は直線紋とコンバス鋸歯紋の反復。1171・1176は甕脚台。

B系統 III—2期を中心とする。1091は太頸壺B。口縁部は回転ヨコナデ。外面に波状紋。口縁部外面から体部上半は縦位に櫛I種A類で施紋後横位に直線紋を施す。1161は台付甕。1163は、櫛II種A類の施紋。口縁部外面はハネアゲ紋→横位短線紋→鋭い切り込み状沈線の斜格子紋を施した後沈線を加える→横位短線紋→縦位波状紋の周りを沈線で方形に囲む単位紋を幾つか頸部紋様帶に懸垂させ、その他は体部に独立に配置する。そして懸垂紋については下部両端コーナーに沈線を「八」字状に加える。ナデ調整の黒色仕上げ。

993は体部上半の沈線斜格子紋及び波状紋からなる横位紋様帶に、1163よりは簡略化した懸垂紋を附加している。懸垂紋は、沈線で短い横線を何段も刻んだ後両端を縦位の沈線で挟んで梯子状にし、下端に平行沈線が「八」字状のヒゲのように施されている。器面はナデ調整され、黒色仕上げである。

1163や993のような懸垂紋をもつ壺は紋様構成上独立したグループとして扱うことができる。



第184図 SD03出土土器

C系統 1160は深鉢 Ab。底部成形はd。

D系統 1132は受口状口縁壺で、斜格子紋→沈線2条→ハケメ工具刻み→十字紋付加で施紋される。1148は体部上位の張る形態で、ハケメ工具による直線紋が施されると思われる。弱加飾単純口縁甕。

W系統 細頸壺 Wa: 1100・1101、細頸壺 Wb: 1092~1096・1123・1124のほか、細頸壺 Wb をやや大形化した1121(頸部にハケメ工具連続圧痕)・1122、短頸壺: 1097・1103・1125がある。1103は甕の成形法で製作されている。その他、頸部が円筒状をなして全面研磨される1107、体部下半に縦位の研磨が施される1099がある。

高杯は1169がWbで、口唇部は沈線3条を施した上から縦位に櫛で切る。脚部は1110・1127~1129・1170がある。1170は柱状部がほぼ円筒状をなす。また脚部裾端も上方に跳ね上がっている。